詩編の読み方

詩編46:1―11

2026/6/26

　聖書を読む人たちの中には、特に詩編を愛読する方が多いようです。神様を信じている人たちの信仰の歌であり、魂の叫びだからだと思います。それはそれでいいのですが、中には、詩編そのものを「神様の言葉」と理解して、その中から、神様の御心、命令、導きなどを読み取ろうとしたり、そこに書かれている言葉に、絶対に服従しようとしたりする態度を見て、がっかりすることもあります。

　聖書には、神様から直接与えられ、また命じられた戒律があります。それを神様のお言葉として、絶対の権威を認めて服従するのはまだ良いのですが、聖書に記されている言葉のすべてが、そのようなものなのではありません。たとえ、神様が直接命じられたものであっても、あくまでもその時代の特殊性の中で与えられたものも多く、それを現代に、そのまま持ち込むのは正しいことではありません。その上さらに、聖書の多くの部分が、人間の考えであり、人間のしたことの記録であり、人間の信仰の告白であって、神からの直接の教えでも命令でもないのです。

　多くの人がそこを誤っているため、おかしな信仰に陥っているともいえるのです。ちなみに、今朝取り上げた詩編 46 遍も、素晴らしい信仰の歌ではありますが、間違いのない神の言葉でも命令でもありません。神がこのような人間の信仰の歌も、誤りのない神のお言葉である聖書の中に、取り入れてくださったのです。誤りのある人間の言葉であり、不足のある人間の理解ではありますが、それを誤りのない神の言葉である聖書に取り入れ、お墨付きを与えてくださったのです。「誤りのない神の言葉」という意味の、誤った理解が問題なのです。

　詩編の46遍は、その初めの説明にあるように、神の言葉ではなく、コラの子たちが作った歌です。その歌が、どうやら、当時歌われていたアラモテという歌のメロディーに合わせて、歌われたということです。作詞者はコラの子たちですが、作曲者は不明で、元の曲のアラモテというタイトルの、言葉の意味も不明です。神の言葉がこんな曖昧なものでは困ります。

　コラの子たちもまた、とんでもない背景を持った人たちです。民数記の16章に、彼らの酷い物語の一部始終が記されていますので、是非、お読みください。コラの先祖たちの大多数は、モーセとアロンに反逆し、神に背いて、割れた地に飲み込まれ死んでしまった人々です。わずかに残された子孫たちが、後のダビデ王によって、音楽をつかさどる役を与えられたことが、歴代誌の記録に残されています。そのような人たちが自分たちの信仰に立って歌い、また歌わせた歌が、詩編46篇です。コラの子たちはほかにもたくさんの歌を作って、主に仕えていたことが分かります。(Ⅰ歴代 6:37、Ⅱ代歴 20:18-19)

　でも彼らが残した歌のすべてが、正しい信仰の歌ということではありません、間違いもあり、理解が浅い部分もあり、現在の私たちクリスチャンの信仰からは、絶対に認められない部分も多いのです。コラの子たちの歌だけではなく、ダビデを始め、いろいろな人たちの作った歌が150も集められているのが詩編です。それらはまさに、旧約時代の人々の信仰を表現したものであり、その意味においては素晴らしく、私たちの信仰の励ましにも、慰めにも、また教えにも、指標にもなるものです。

　とはいえ、それはあくまでもキリスト以前の、旧約の時代の信仰の表現であり、理解であって、キリストがお教えになり、パウロなどの弟子たちが発展させた、より高度な新約聖書の教えからすると、不完全であり、

時代遅れであり、現在の私たちがそのまま取り入れても、受け入れてもならないものです。ところが、実際は多くのクリスチャンたちが、何の疑いもなく、詩編を神からの言葉と理解して受け入れ、人生の指針として使っているのです。

たとえば、46遍では、エルサレムは神の住む都であり、それは揺るがないものであると語られていますが、それは、ソロモンの時代の荘厳で巨大な神殿があったエルサレムに対する、一般のイスラエル人の誇りと憧れを表現したものであって、それが間違いであったことはすぐにわかりました。この神殿は、エルサレムはバビロニア帝国によって破壊され、神殿も蹂躙され、廃墟となってしまいました。紀元前587年の出来事だったと思います。再建され神殿も、キリストが予言された通り、紀元70年にローマ軍によって破壊されてしまいました。エルサレムに対する誇りと憧れは、当時の人々の信仰の表現ではありましたが、神の言葉ではないのです。

さらに大きな問題は、旧約聖書全体に通じる人生哲学のようなもので、いわゆる、勧善懲悪の思想でまとめられていることです。この思想が間違いであるということは、ヨブ記という古い時代の書物（アブラハムと同時代を舞台に記されている）のテーマにさえされているのですが、まだまだ一般の人々には理解されていなかったのです。神は正しいものを祝福し、その人生を反映させられるが、悪人の人生は憎み、滅ぼしてしまわれるというのが、当然の人生哲学だったのです。その当時一般的だった人生哲学に激しく抵抗し、戦い続け、苦しみ続けたのがヨブという人物だったのです。その人生哲学は、悪魔の信仰の哲学と同じだったことが、ヨブ記で明らかにされているのです。

さらに、詩編で非常に明らかなのは、復讐の精神です、詩編の多くが悪人を滅ぼして下さい、私を攻め立てしかも繁栄している悪人を早く滅ぼして、私が正しい者であることを示して下さいという、敵を憎み、その滅亡を祈る歌なのです。あの美しい詩編23編でも、それが明らかです。

これに対して、キリストは敵を愛し迫害する者のために祈りなさいと教え、悪人に手向かってはならないと諭しておられます。パウロも、復讐してはならない。かえって善をもって悪に勝ちなさいと教え、復讐は神のなさることであると教えています。ですから、現在のクリスチャンたちは、詩編を読むとき、このあたりのことをそっとごまかして、「霊的解釈を施して」読んでしまいます。なんとなく違和感を抱き、そっと自分の信仰の枠から外してしまう、あるいは無視してしまうことが多いのです。

本来、そのような霊的解釈は不要です。旧約聖書の時代の聖徒たちはその時代背景の中で、信仰を持ち、その事情の中で生きていたのです。彼らの信仰は、その後に現れてくださった、キリストの愛と許しの教えを知りません。そのために、勧善懲悪の世界感を持って生きていたのです。ただし、間違ってはなりません。勧善懲悪の世界観は、この世の世界観としては間違っていても、永遠ということを見据えた世界観、キリストの世界観では正しいのです。神様はあくまでも、すべての人々の生きざまを、公平に、正しくお裁きになるお方です。ですから私たちは、その神に信頼して、自分で裁くことはせずに、あくまでも赦し、愛することに徹するのです。私たちの不完全な理解では、間違った裁きをすることになるために、私たちは決して裁かないのです。

この世界では、「なぜ悪人が栄え、善人が苦しまなければならないのですか」と、呻き叫ぶことが多いのですが、神はすべての人を、その行いに応じて、公平に報いてくださるのです。ただその公平な報いを与える裁きは、この現世においてではなく、死後に行われるのであると、キリストは教え、その神の裁きにすべて

を任せ、クリスチャンは決して神の裁きを自分の手に取ってはならないと、警告しておられるのです。永遠の命ということに関して、ほとんど理解のなかった旧約時代の人々には、キリストによってはじめられた、新約的な理解は到底かなわなかったことなのです。

ところが、権力を手にしたクリスチャンと言われる人々は、新約時代に生きた人々なのに、宗教的権威を取った者たちも、世俗的な権威を勝ち得た者たちも、キリストの教えを無視して、神の権威を自分のものとして、殺傷与奪の権威を主張して猛々しく振舞ったのです。そこが、神の権威をできるだけ用いなかった、あるいは、用いることを拒否さえした、心優しい神の人モーセと違うところです。

詩編は、そしてまた聖書の記述の多くは、当時の信仰者が、自分たちの環境と理解に応じて語り、行い、振る舞ったことの記録なのです。その信仰に学ぶべきことはたくさんありますが、間違いも、理解不足も数々あります。それらすべてを、霊感された神の言葉として、神の直接的ないましめ、あるいは命令として受け取ってはならないものです。神様はそのような聖書をまとめて、神の言葉として人間にお送りになったのです。極端な事実を言うと、聖書は誤りのない神の言葉ではありますが、そこには人間の悪意のある言葉や思想、間違った信仰理解や信仰による行動も記されています。

それだけでなく、聖書には、もっともらしい悪魔の言葉も記されていますし、悪魔が聖書の言葉を悪用している事例さえ記されています。聖書は、単純な神の言葉ではないのです。

さあ、それでは、復讐の祈り、仕返しの息に弾んでいる詩編も、道徳的にどうなのかと心配せずに、読んでみましょう。当時の人々の信仰の善いところに学びましょう。素晴らしい信仰の表現がたくさんありますよ。新約聖書の教え、キリストの教えから判断して、間違っているところも、不足しているところもあぶり出して、きちっと見分けて判断してこそ、詩編の素晴らしさが分かるのです。

さらに聖書を読む場合の重要な要素は、パウロなどの新約聖書の記者たちが、聖霊に導かれて理解した教えも、あくまでもその時代という舞台と、彼らが受けた教育という背景に縛られていることに気づくことです。つまり、彼らは、あくまでもユダヤ人にとして、与えられたユダヤ人の受けた教育を背景に、福音を理解していることを理解しなければならないのです。パウロは、ユダヤ人の民族主義的福音理解を打ち破り、普遍的な福音、つまり、神の救いはユダヤ人に限定されているのではなく、すべての民族に公平にそして平等に、同じ信仰という原則によって与えられるということを、見事に解き明かしました。

なかでもパウロは、まさに、福音の普遍性を明らかにした使徒であり、異邦人への使徒と呼ばれるにふさわしい人物でした。しかし、彼の福音理解の説明にも限界がありました。彼は福音をあくまでもユダヤ人として、ユダヤ人の救いという枠を打ち破って、全人類に及ぶものとして提示しましたが、その理解は、どうしようもなく、ユダヤ人的だったのです。ユダヤ人の中から、ユダヤ人的な感覚で、福音の普遍性を語ったのであり、私たち、異邦人である日本人には意味が通じないことが多いのです。そこが、キリストがお語りになり、お示しになり、そのために生きてくださった、異邦人のための福音とは異なっているのです。

いまは、キリストがお語りになった、天の父の福音、良い者にも悪い者にも太陽を昇らせ、雨を降らせてくださる優しい父の福音が必要なのです。罪の贖いを要求する、厳しい神の普遍的福音の神学、つまり、ユダヤ人の側からの普遍的福音の神学ではなく、異邦人の側からの、普遍的な救いの神学の説明が必要なのです。パウロはさすがに偉大な神学者であり、異邦人の側からの神学の、基盤となるようなことは語っていますが、(ロマ書2章全体)それを発展させる機会がないままになっているのです。パウロは、実際に

は異邦人の伝道と言うものをほとんどやっていないために、そこを深めることができなかったのでしょう。ユダヤ人の枠を超えたパウロの説明ではなく、異邦人の側から見た、普遍的福音こそ、いま必要とされていることです。キリストの「天の父の福音」に脚光が当てられなければなりません。

パウロを始めとする弟子たちの神学は、キリストの贖いに関わる神学ですが、キリストの神学は、神の国に関わる神学です。キリストの贖いの神学は、あくまでも、神の国に入るための手続きの問題、過程の問題にすぎません。本題は神の国なのです。神の国とは、神の支配の事であり、天国と同じ意味です。天とは、神を神と呼ぶのを恐れた敬虔なユダヤ人のために、神という言葉の代わりに用いられたものです。

キリストの贖いの働き、十字架の御業は、神の国の実現のための、絶対必要条件でした。それを旧約聖書という「養育係」をもって説明したのが、パウロなどの弟子たちが残した、新約聖書の神学です。しかしキリストは、彼らよりもさらに大きく広く、ユダヤ人と異邦人の違いという枠を超えた、神の国という主題で、人類の救い、神との和解のテーマを取り扱っておられたのです。いま日本人に必要なのは、このキリストの神学、神の国の神学、悪い者にも良い者にも、そしてユダヤ人にも異邦人にも、何の差別もなく、太陽を昇らせ、雨を降らせてくださる神様の教えです。そのような神についての教えならば、ユダヤ人の文化を背景とした、キリストの十字架の教えを理解できない日本人でも、理解することができるのです。

パウロによると、救いとはキリストを信じる、あるいは神を信じることによって得られるものであり、救いの結果はキリストのみ体にバプタイズされ、聖霊を飲むこと、すなわち神との霊的な交わりを回復し、神の福音のために働くものとなることです。キリストによると、救いとは神の国に生まれ直すこと、あるいは神の国に召し入れられることであり、罪のために途絶えていた、神との交わりが回復されることなのです。どちらにしろ、神との交わりの回復が主要なテーマであり、パウロはこの世での、前味としての不完全な交わりについて、つまり、教会生活について多くを語り、永遠の御国の交わりについては、希望としてわずかに語るだけですが、キリストは少ないお言葉の中ですが、この世の命を終えた後の、永遠の命の中の完全な交わりに、重点を置いて語っておられるのです。